# 各市の文化財紹介

## 枕崎市

### 【 喜入家十七代大概之譜十八代履歴荒増 】

鹿篭（現在の枕崎市）領主十八代の喜入摂津守久高（ひさたか）が書き残した文書である。喜入家の初代から十七代までの事跡と自らの略歴を記してある。これによると喜入家は，島津宗家九代忠国（ただくに）（加世田に墓所在り）の七男忠弘（ただひろ）が分家して喜入を所領したことに始まり，五代季久（すえひさ）の代に太守島津義久の命で所領地名を名乗るようになる。季久は義久の家老として多くの勲功を上げ，鹿篭を加増された。この後，鹿篭は，六代久道が吹上の永吉に移封された一時期を除き，藩政時代を通じて喜入家の所領であった。

さて，これを著した久高は，島津久光とその子忠義の公武合体路線に反対した筆頭家老の島津久徴（ひさなが）が左遷された後に，筆頭家老になった人物である。久高は，妻の妹婿である小松帯刀を家老に抜擢し，さらに精忠組の大久保利通らを登用して藩政運営にあたった人物である。黒船来航時の江戸藩邸の様子や薩英戦争，西南戦争等のことが書かれていて興味深い。

## 指宿市

### 【 前田利右衛門墓石 ～ サツマイモの功労者 】

江戸時代の宝永２年（１７０５），琉球からサツマイモを持ち帰った山川の漁夫利右衛門は，今では徳光神社の祭神に祭られています。利右衛門の墓石は，昭和６０年に指宿市の有形文化財に指定されました。利右衛門の功績は，いうまでもなく琉球からサツマイモを持ち帰ったことです。しかし，ただ持ち帰ったということだけが，彼の功績ではありませんでした。

利右衛門は，サツマイモの有用性をいち早く認識し，それを人々に伝えました。為政者ではなく名もない一人の漁夫が，一生懸命に栽培方法を広めた結果が，やがて日本の飢饉を救うことになるのです。民間人として，始めてサツマイモの普及に努めたことこそが，彼の偉大な業績といえます。大隅半島東串良の細山田に，利右衛門の霊を慰める碑があります。それには「唐芋元祖」「一翁祖元居士」「山川児ヶ水之　俗名利右衛門」と記されています。また，鹿児島市吉野にも利右衛門を顕彰する碑があります。この時代，利右衛門は人々にとって最も有名な民間人の一人であったことがうかがい知れます。

さて，今日サツマイモは焼いたり煮たりするだけでなく，サツマイモ料理として工夫され，焼酎というアルコール飲料まで作られています。利右衛門が広めたサツマイモは，その可能性を大きく広げて食文化の変革をもたらしました。

指宿市の文化財となっている利右衛門の墓石は，山川石で作られた立派なものです。その墓石の傍らに，利右衛門の頌徳碑が建てられており，彼の功績がよく分かります。

人々は，利右衛門の行為そのものに神性を見たのでしょう。明治になって徳光神社が建てられました。神名は，玉蔓大御食持命（たまかずらおおみけもちのみこと）です。カライモの蔓が広がって，食物であるサツマイモが，玉のように多く実る様を表しています。

なお，山川石は凝灰岩の一種で，多くは墓石のほか石塀などに利用されます。その利用分布は広く，遠く沖縄から京都にまで広がっています。島津家久が慶長３年（１５９７），京都の今熊野観音寺に建立した逆修五輪塔が北限となっているようです。市内の文化財となっている石造物の多くに山川石が使われています。

## 南さつま市

## 万之瀬川河口域のハマボウ群落及び干潟生物群集

（ 国指定天然記念物：平成１９年２月６日指定 ）

万之瀬川の河口域は，１０数年ほど前，クロツラヘラサギ（環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧 IA 類に指定）が越冬するようになってから注目され，平成１９年に「万之瀬川河口域のハマボウ群落及び干潟生物群集」の名称で，万之瀬川の左岸約 1 km，最大幅約 100m，面積で 80,610.16 ㎡の河川区域・港湾区域が国の天然記念物に指定された。

また，指定区域内は，国内有数のハマボウ群落が形成されており，７月頃に淡黄色の美しい花をたくさん咲かせる。さらに，国内最大規模のハクセンシオマネキの生息地でもあり，白色のハサミを振るしぐさは，とてもユーモラスで一見の価値がある。

これらの貴重な動植物を観察できる散策路も整備されていることから，豊かな自然環境を肌で感じることができる万之瀬川河口域に，ぜひ一度おこしいただきたい。

ハクセンシオマネキ

## 南九州市

## 知覧城跡（ちらんじょうあと）

【 国指定史跡 】
（平成 5 年 5 月 7 日指定）

知覧城跡は 2008 年小学館の『日本名城 100 選』にも選ばれている。まるで大きなお碗を逆さまにして並べたようになっているのが城跡である。中央に谷筋が入っているが，ここが大手道であった。シラス台地特有の垂直に切り立った崖が，壮大な規模の空堀となって知覧城を守った。航空写真でみるとその様子がよくわかる。いくつもの大きな曲輪（くるわ）（人工的な平坦地）が横並びの関係で集合した南九州の特徴的な並立的な構造を示す。城跡の北側 1 キロ先には市街地の知覧麓の武家屋敷の町並みがある。現在は重要伝統的建造物群保存地区となっているが，その武家屋敷の起源は，中世の知覧城にあった。

中世知覧城跡は文和２年（1353），佐多忠光に知覧があてがわれ，応永 24 年（1417）今給黎久俊が入城したが，同 27 年には島津久豊と佐多親久が囲み奪取，再び佐多氏の居城となる。天正 19 年（1591）佐多久慶は一族の海賊事件の責任を負い川辺宮（みや）村に移封されるが，慶長期（1596～）ごろには知覧城は出火に遭い廃城となっている．城域は約 40 万㎡，大空堀（からぼり）で区画されている。下から曲輪までの高さ約 20m～30m，中心部分には本丸，蔵之城，今城・弓場城があり，取囲むように式部殿（しきぶどの）城，東ノ栫（かこい），西ノ栫などの城郭がある。

発掘調査は平成 4 年に始まり，掘立柱（ほったてはしら）の建物跡や虎口（こぐち）（入口），炉跡，ゴミ捨て場等が出土，伴って中国の青磁や染付け碗や皿，タイ産の陶磁器，鎧（よろい）の一部や鉄砲の弾，十一面観音菩薩像なども発見されている。平成 17 年には蔵之城跡が整備された。現在，保存のための定期的な管理が行われ，ミュージアム知覧には模型や資料などが展示され，ビジターセンターの役割を果たしている。

知覧城跡の上空写真